

「もとはこちら」のお話し

No.59

今月のテーマ

天を恨まず



結局は せんじつめたら みな自分

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

私達は、今、生きています。

北原ゆり筆

こういう時代に、こういう場所で、こういう両親の元に生まれてきて、そしてこういう肉体や心を持ち、今、私達は懸命に青い地球の上で生きています。そのようにして、世界中の人々が夫々のいのちを懸命に生きているわけですが、今の自分の人生に満足している人もいれば、もっと別の人生を生きたい、或いは生きたかったと考えている人がいるかもしれません。

過ぎ去った人生を振り返り、できることならもう一度初めからやり直したいと思っている人がいるかもしれませんが、もう一度あの頃に戻りたいと思う人がいるかもしれません。或いはまた、不幸の連続を味わい、人生なんてもう真つ平だ、二度と人間として生まれてきたくはないと思っている人がいるかもしれません。しかしどれ程強く望んだとしても、現実問題として私達は時間を戻す事はできません。それはたとえ全知全能の神であっても、今を過去に戻す事は不可能です。しかし、その過ぎ去った過去をどう評価するかという事ならば、私達は今からいくらでもそれを変える事はできるのです。過去の体験の中から神の教訓を学び取り、それを未来に向かって生かす事が出来れば、たとえそれがどれ程の悲惨な体験であったとしても、それはかけがえのない貴重な宝の体験となるのです。

どの様に受け入れるか

例えば今回の東日本における大震災、そして紀伊半島の豪雨による激甚災害などの場合も、そういう事が出来ます。

また今東南アジアのタイでは大変な洪水の被害に遭い、それがいつ収束できるかも分からないという大きな不安の中にあります。たまたまこんな時代にこんな国に生まれ、そしてたまたまこんな場所に生き、こんなひどくて辛い目に遭ったという事をどのように考え、それをどのように受け入れていくかという事が私達は問われています。

失った家族や友人知人など、かけがえのない人々のこと、失った家や仕事のこと等を思い、突然にして襲ってきた理不尽な運命をどう受け入れ、どう考えていけばいいのか、今も尚、こころの整理の付かない人が沢山いることでしょう。

被災直後はあまりの事に、現実を現実の事として受け入れる事ができず、いつも以上に明るく気丈に振舞っていた人々が、時間の経過と共にその体験のすさまじさが実感され、打ちのめされ、生きる気力や体力を失ってしまったようになっていく人も多いと聞きます。新聞やテレビなどで被災地の様子を知った人が、実際に被災の現場に入ってみて、想像を絶するその姿に言葉を失ったという話もよく聞きます。

それで被災地の様子を出来るだけ沢山の人の見てもらい、自分の目で観、肌で感じたその上で、被災者の心に寄り添い、災害を自分の事として考え、将来をどう築いていくかを共に考える事の必要性を説く人がいる一方で、復興の為の大臣に任命されておきながら、自分に課された重要な仕事のその意味さえ理解できず、まるで幼児のように悪ふざけしてはしゃぐ愚かな人間もありました。

さて戦争を語り継ぐ会などがありますが、戦争の体験者が自分の体験を若い人達に語り伝え、絶対に戦争はしてはならないという事を今も強く訴え続けている人が沢山います。

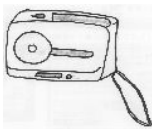
現実には戦争を体験した人の実感もった強い訴えは、戦争を知らない世代の心にも強く響きます。その為、人間が人間らしく生きるには、私達一人ひとりが今どういう心を持って生きる事が必要であるかという事を深く考えさせる、大きな力になっていくはずで

かく言う私の両親も戦争の体験者であり、折りあるごとに自分達が体験した戦争の事を、話して聞かせてくれました。

それは生々しい話であり、聞きながら自分自身が今その体験をしているような感覚を覚え、戦争の悲惨さというものを身をもって感じる事ができました。

本来の自分とは

ところで、自分が体験した事は、それが災害であれ、戦争であれ何であれ、その内容に関係なく、その事を体験した本人の中には、それを体験しなければならぬ何らかの理由、原因、そして目的が



必ずあるのだという平井先生の教えは、時として激しい反撥を受ける事があります。場合によっては反撥を超えて、憎悪の目を向けられる事さえあります。

しかしこの平井先生の『もとはこちら』という教えは正しく、どんな場合であっても、この教えにはひとつの例外もありません。

直接的に被害を受けた人には、直接的に被害を受けるという理由と原因と目的が、そして間接的に被害を受けた人には間接的に被害を受けるという理由と原因と目的が、必ずその人本人の中にあるのです。自分に何の原因も理由も目的もなければ、私達がそういう体験をするという事は決して起きては来ません。

しかしだからと言って、いかなる人も自分をこんな目に遭わせた加害者探しなどをする必要はありません。しかしどうしても加害者探しをしなければ気がすまないという人は、そこで「自分という存在」を常識を超えた『内なる目』で見つめなおして頂きたいのです。

殆どの人は、自分というのはこの肉体だと思っております。

そして肉体が減れば、この自分は無くなるのだと思っております。

しかし私達のこの肉体というものは、自分の命を表わす場なのであって、自分は肉体そのものではありません。こういう肉体を造りだし、こういう人生を造りだし、そしてこういう運命を造りだし、日々刻々とそういう自分を表現し続けているものが、「自分」というもののなのです。

本来の自分とは、この肉体や心や運命など、自分に関する全てのものを造りだす原因者の側にあるという事です。

そして自分というのは、実はこの個我肉我であると同時に、そういう個我肉我を創りだし、生かし、そして滅して行かせる肉体を超えた不可思議な存在であるという事です。本当の自分というのは、この自分の肉体の存在を含め、全てのものを生かし続けている大きな大きな存在なのです。

この存在の事を、全ての大元である神仏といっても良いのですが、神仏という言葉を使う事に抵抗があれば、その存在を大自然と置き

換えていいとも良いと思います。

そのうえでこの個我肉我の私達が体験した一切の事を、神仏あるいは大自然の視点・観点から眺めてみると、今までとは全く異なった姿となって、それは見えてくる筈です。

必要のない事は起きてこない

大自然は、その自らの摂理に基づいて、丁度良い時に、丁度良い事が起きるように、一時の休みもなく常に働き続けております。

ですから、たまたまとか偶然とか奇跡という様な事は、絶対に起きてきません。起きてくる全て事の全ては必然の事ばかりであり、全ては必然の連続です。

しかしこの自然の摂理、自然の法則の事を、一人ひとりの生活や人生に当てはめて話をする、殆どの人は納得せず、猛烈な反対にあり、場合によっては猛攻撃を受けるのです。

しかし私達がこの神の摂理、自然の法則が正しく理解できない限り、という事は、本来の自分というものが分からない限りは、人間の本当の幸福という事も、そして人間としての正しい生き方という事も分かりようがありません。

そして人生にはたまたまとか偶然という事が起こり、人生は不公平で不平等であり、自分がなぜそういう体験をしなければならなかったかという事も分からず、幸せになる為のものの考え方や生き方も分からないという事になってしまふのです。

自然と人間が切っても切れない関係にあるように、自然と私達人ひとりの関係も、そしてまた大生命である神仏とこの個我肉我の自分も、夫々は切っても切れない関係にあるのです。

自然の子である私達人間が、自然を支配できると思ったり、自然を侮ったり、あるいは自然の脅威を忘れ、矮小化してその自然を破壊するような振る舞いに出れば、当然の事としてその行為にふさわしい結果が自然の摂理のままに現れるだけです。大惨事です。

自然は、自分とべつに存在するのではなく、自然とは、自分そのものです。自分を造り出し、そして自分をこのような状態で成り立たせているものです。自然の分かれたものが、自分なのであり、その自分が、自分を造りだし自分を生かしている自然を壊していくのですから、それはそのまま自分自身を破壊していくという結果になるのです。

原子を破壊する事は、自分を破壊する事

自然を構成する基本物質は原子です。

原子を破壊してエネルギーを取り出し、時には武器を、時には電気というエネルギーを取り出すとする行為の結末は、誰の目にも明らかです。ひとつは先の原子爆弾による非道な人間性の崩壊であり、そしていまひとつは、人間の力では収束させる事もおぼつかない、地球規模での放射能汚染による大災害です。放射能という形で、一人ひとりの肉体を構成している原子を破壊し、全ての生あるものを次々と破壊し、自然界を破壊していくという事です。原子を破壊する行為は、神の領域をおかす結果に繋がるのです。

原子の破壊は、肉体を創り出した神に対する挑戦であり、絶対にしてはならない事です。

原発が単純計算による割安なエネルギーであるというまやかしゃ、平和利用であるというような聞こえの良い言葉に、私達は決して踊らされてはなりません。

ある中学生が今回の大惨事を前にして、「天を恨まず」と言ったという事が、多くの人の共感や感動を呼んでいるようですが、私達大人は、自然そのものを構成する原子を破壊してまで生活の便利さを追求することのその愚かさや危険性を、どこかで薄々気付いていた筈です。誰もが気付いておりながらも、それに気付かぬ振りをし、目の前の便利さを優先させ続けてきたその愚行に対し、自然が、神が、天が鉄槌を打ち込み、一刻も早くその愚を止めさせようとしたのです。私達を破壊の道から救いだし、人類を正しい道に戻す為なのです。



天を恨まないのは当然の事であり、恨むどころかその天の深い思いに対し、私達は感謝しなければならぬのです。そして一刻も早く方向を変えなければなりません。

遺伝子操作にひそむ危険性

原子を破壊するというこの愚かな行いと共に、もう一つ大きく懸念される事があります。それは科学・医学の最新治療という名の下で遺伝子を操り、新たな生命操作を行おうとする行為です。

いつも言っています様に、命とは神そのものであり、神は全ての生あるものの生命バランスを司っているのです。遺伝子操作によって人が神を操るなどという事は、決してしてはならない事であって、それは神への冒瀆、自然への挑戦です。このことの危険性をはっきりと認識しなければ、今回の原発事故同様、いつか必ず私達は、自分自身を、そして人類を破壊する事になるはずで

人間が神の領域に手をねじ込み、自然のリズムを、神の摂理を根底から覆そうとする様な間違ったあらゆる行為は、私達すべてのものの命を破壊し、全ての存在を根底から破壊し、破滅の方向に向かわせる事になるのです。

誰をも恨む必要はありません。

今現在、私達が体験している事のその全ての原因は、全部自分の過去の行為行動の中にあるのです。そしてその原因に丁度見合った最高の結果を私達は常に体験し続けているのです。私達は誰もが当然の事ばかりを体験し続けているという事を、一分の疑いも挟まず信じざる事が必要です。

好むと好まざるに関わりなく、私達は一人の例外なく、自然の摂理どおりの人生を夫々に体験し続けているのです。辛い結果を辛い事としてしっかりと受け入れ、そこから目をそらす事なく、その体験を教訓として受け入れ、過去を否定する事なく、勿論天を恨むことなく、永遠に生き続けている命としての観点で自分の人生を見ていくことです。

体験した事をどの様に思い、どの様に受け取り、これからどの様

に行動するかによって、その一つひとつに一番ふさわしい最高の結果が必ず明日の私達の人生の中に現れてきます。そしてそれを私達はこれからも体験し続けていくのです。

自分とは何ものなのかという事がはっきりと分かれれば、全ての創造主である神と自分の関係もはっきりと分かる筈です。内なる自分とは、創造主そのものです。

全ての人がその内なる自分によって生まれ来て、そして生かされ、やがて肉体は滅びても、本来の自分は決して死ぬ事なく、これからその内なる自分に一番ふさわしい生き方で生き続けていくのです。

体験する事にはひとつの偶然もないという事、そして自然の摂理にはひとつの例外もないという事、そして自分の思った通り、した通りに未来は開けてくるという事を、根こそぎ信じる事が必要です。しかしこの「もとはこちら」という自然の摂理は、私達人間が信じようが信じまいが、未来は必ずその様に開けてくるのです。どのような明日を作るかは、ひとえに今の私達にかかっています。

【ご案内】

十一月の勉強会は、十一月十二日(土)午後七時からです。皆様のご参加を、お待ちしております。

勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com

TEL 073・461・6300

